第5回 SPARC Japan セミナー2012
「Open Access Week ー 日本におけるオープンアクセス,
この10年これからの10年」

Open Access と（研究者としての）私

植田憲一

電気通信大学　レーザー新世代研究センター
（1981-2012）

国立情報学研究所
２０１２年１０月２６日

本セミナーにおける（自分で与えた）私の役割

私は学術出版の研究者ではない。単なる物理学者である。

新しい情報を伝えるより、変わらない事実を伝えようとします。

人々はともすれば変化を追いかけようとする。
それは変化の方向が正しいという前提に基づいている。
しかし、本当は自分で判断しなければいけない。

どのように間違うかをよく知っているのは、よい研究者である。

OA化論議は、どこか根本でおかしくないか。

へそ曲がりが私たち研究者の特質である。

研究者はOA化について、いくつもの顔を持っている。それらは場合によっては、矛盾する。

Public

Personal

①著者　②読者

ボランティアとしての顔

個人としての顔

③レフリー

④エディター

⑤編集長

Public

コミュニティー代表としての顔

⑥学会員、学会理事

⑦学術会議、IUPAP、世界の学術コミュニティー

２．１　著者としての研究者から見たOA化

論文購読無料化は流通拡大し、自分の論文が読まれるという点でOK
（しかし、出版チャンネルに乗らなければ、インターネットのゴミ情報に埋もれる。）　○

著者負担金が重くなるのは困る。（研究費が実質減となる。エゴですね。）　×

国や機関が著者負担金を支払ってくれる仕組みができれば、大歓迎
（そのための審査が入るなら、面倒になる可能性も）　○

論文発表に研究機関による格差が発生すれば大問題　（パブリックな観点）　×

ライセンスの緩和、再利用の拡大は大賛成　（元来、私の論文だ）　○

質のよいジャーナルが生き残るのは、競争原理からして当然で歓迎　（建前）　○

多様な質のジャーナルがなくなって、一極集中することは　反対　（パブリックな観点）　×

自分が自由に投稿、出版できるジャーナルがほしい。本当のことを書きたい。
（個人的利益からの観点）（同時に、パブリックな観点も含む）　？

無料ほど安いものはない

２．２　読者としての研究者から見たOA化

無料で論文が読めるのは、大歓迎。　○

論文の質の保証は必要　？

フリージャーナルは困る　×

無料ほど安いものはない

２．３　レフリーとしての研究者から見たOA化

Peer-reviewの質とOA化は無関係　であるべき

Daily出版が進むと、迅速審査への圧力が高くなり、大変

（Online only OA journalでは、Daily出版を避ける理由はない。
現状の出版形式は図書館定期購読を前提としたものだから。）

元来　無料なので変わらない

2.4　エディターとしての研究者から見たOA化

Daily出版の圧力は、レフリー以上にエディターに負担がかかる。なぜなら、最終的な掲載判定はエディターの責任だから。

？

質の保証と定常出版の軋轢がある。

世界のトップジャーナルは、リッチな研究者が多く、投稿料支払いに問題は生じないだろう。（名誉が認められ、問題指摘と多くをRejectして済む。）

○

むしろ、若手研究者が投稿し、教育を受ける裾野ジャーナルの負担が厳しくなる。
（大して名誉でない。大きな修正につきあう必要がある。論文指導が大変だ。ボランティアなのに、などなど）

×

しかし、裾野ジャーナルなしにトップジャーナルの質は維持できないし、特に日本にとっては重要。

やる仕事は変わらない。

ますます、報われない仕事に
そんなジャーナルはやめてしまえでよいのか？

２．５　編集長としての研究者から見たOA化

世界の一流紙の場合、ビジネス観点が必要ないので、変化はない。 ○

それほど強くない学術誌の編集長の場合、一流紙の圧力はますます強くなる。 ×

同時に、論文掲載とジャーナルの収支が直結するため、気楽にrejectしていると、廃刊の危機が発生する。 ×

編集長と出版委員長の機能の独立性が弱くなる。

（ベテラン研究者から、OAジャーナルになると、論文の質が低下すると危惧されるメカニズムはここにある。

無料ほど安いものはない？
無料ほど高いものはない？

2.6　学会員、学会理事から見たOA化

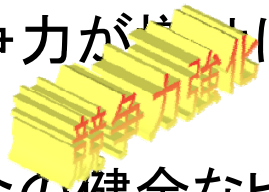
**無料では
やっていけない**

学協会自身、学術研究、科学研究のためには必要な組織である。

ジャーナルOA化は、出版ビジネス競争への対応であり、論文品質の向上とは無関係（独立）な問題である。（植田私見、同時に、出版業界の常識？）

学術コミュニティーとしては、仕方ないので、対応している。（本音）
それを通じて、学会員の利益につながれば、これはよい。（建前）　？

自学会のジャーナルの競争力が強ければ、歓迎、弱くなるなら反対



ジャーナルOA化は学会の健全なビジネスとして、維持できるか？　？
　重要な関心事　（理事としての観点、ひいては会員の利害に）

日本がだめなら、世界学会に依存すればよい、は正しいか。（会員目線）

学問、科学の発展は、異端から正統を生み出す過程であったし、これからもその可能性が高い。ならば、モノポリーを避けるのは、学協会の根本原理である。

誰が費用を払うのか、はっきりしてほしい

2.7　日本学術会議、IUPAP委員から見たOA化

学術活動の公益性は私的な利害を超越する、という立場

学術活動の成果をPublicなものにしようという考えは、学術組織の根本原理を構成している。

○

同時に、学術組織、学協会活動が、**所属会員の私的な利益とPublicな利益が重なる**ことに、学術研究、科学研究の大きな特徴があると主張する。

ここは他の社会と異なり、私的な利益とPublicな利益が相反するするものではない、特殊な分野である。

学術分野の差を超えて、学術活動全体をどう発展させるかが関心事。

世界のトップジャーナルと裾野ジャーナルの両立を模索し、双方の努力を多とする。

個別の学協会ではいいにくいことをいう。
政府に対する財政支出の要求（Finch Report）、予算の流れのRe-directionなど。
OA化はフリーではない。

？

歴史を重ねて形成した学術出版・流通

科学論文は変わった商品である。

From 国際図書館シンポジウム講演（2002年）から

変わった商品の特質に合わせた検討が必要

一般の商品

作成者は商品の流通から最大利益を求めようとする。
最大利益とは金銭的利益である。
コピー権は科学論文における商品としての性格を表している。

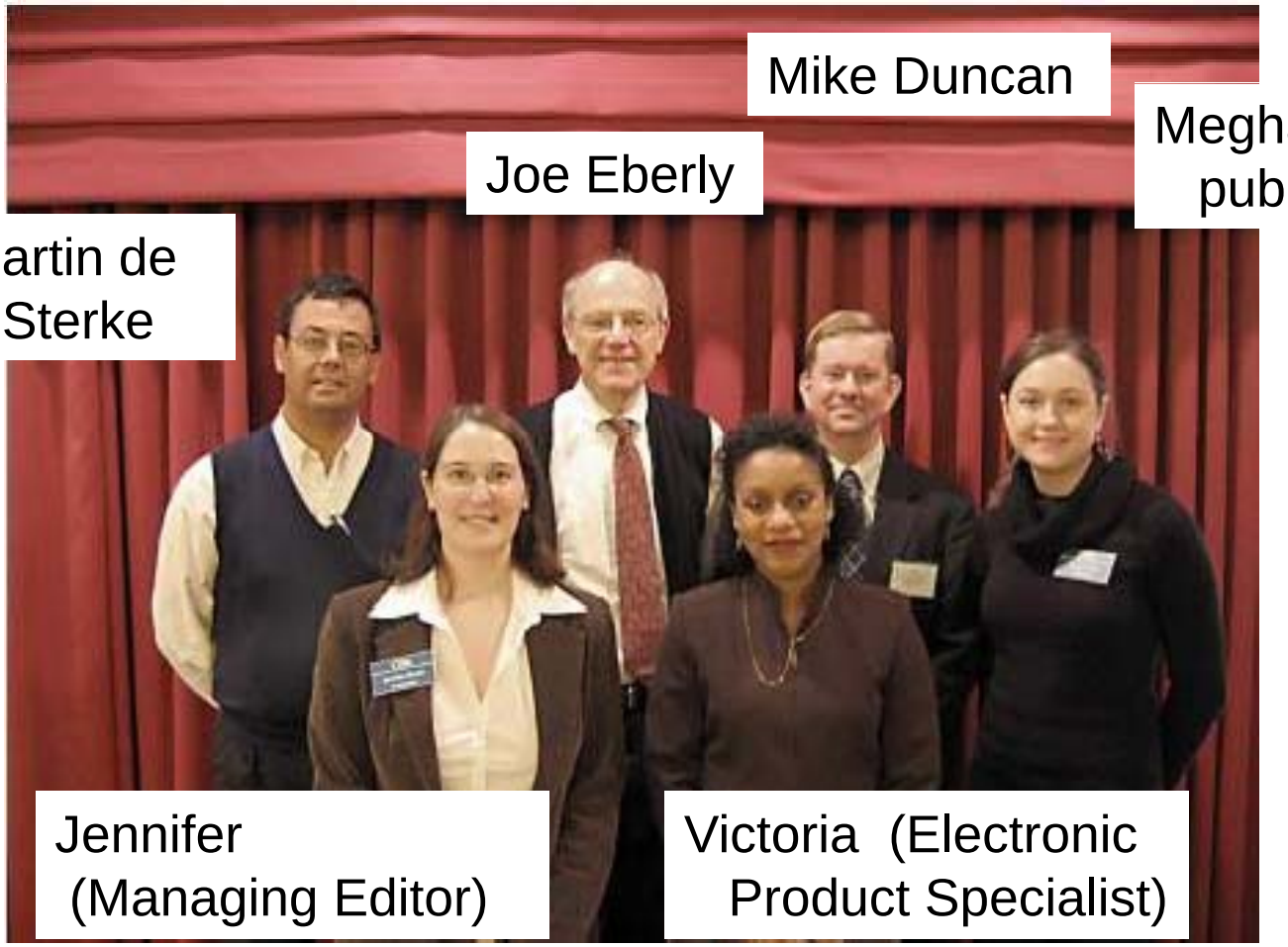
著者から見た科学論文　　商品性の欠落

1. 研究の成果を世界に認めさせるには、権威あるジャーナルの論文として出版し、流通させる必要がある。
2. そのためには、自らの論文にアプローチするための費用は低い方がよい。できれば、無料が望ましい。（オープンアクセス）
3. 学術研究そのものは、自己利益のためではない。（学術活動の公益性）
4. 誰もがコピーして利用するのは、著者から見れば大歓迎
5. しかし、きちんとした論文審査、出版体制は重要
   研究者のボランティア活動で支える。（**Peer Review Journal**）

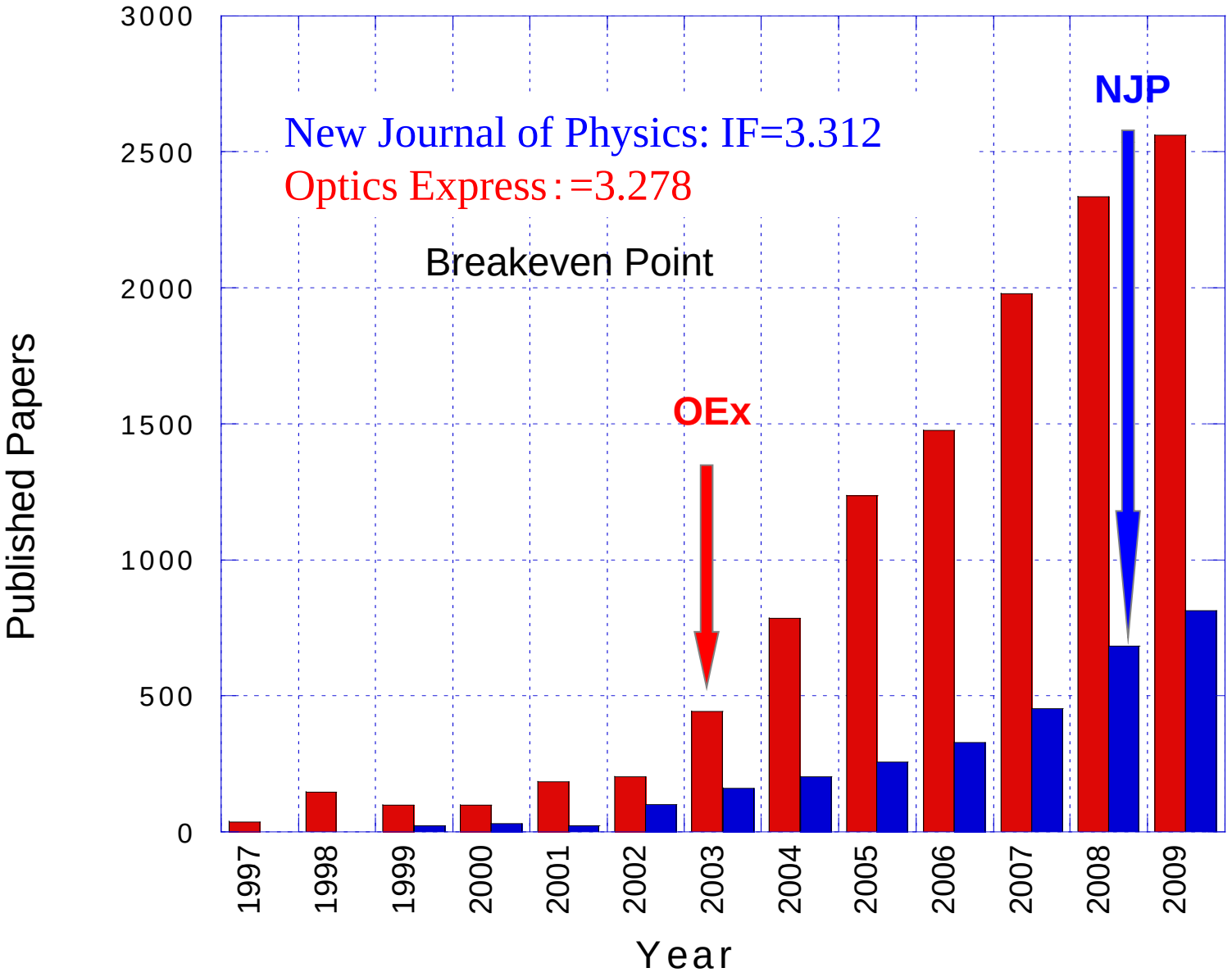
電子化ジャーナルの発展は　論文の著者としての幸福と論文ジャーナルの苦境を生み出しつつある。

Optics Express Editors and Staffs

植田私見:もっとも成功したOA Goldジャーナル



もっとも成功したOA Goldジャーナルでも、収支均衡点に到達するのに、7年はかかった。



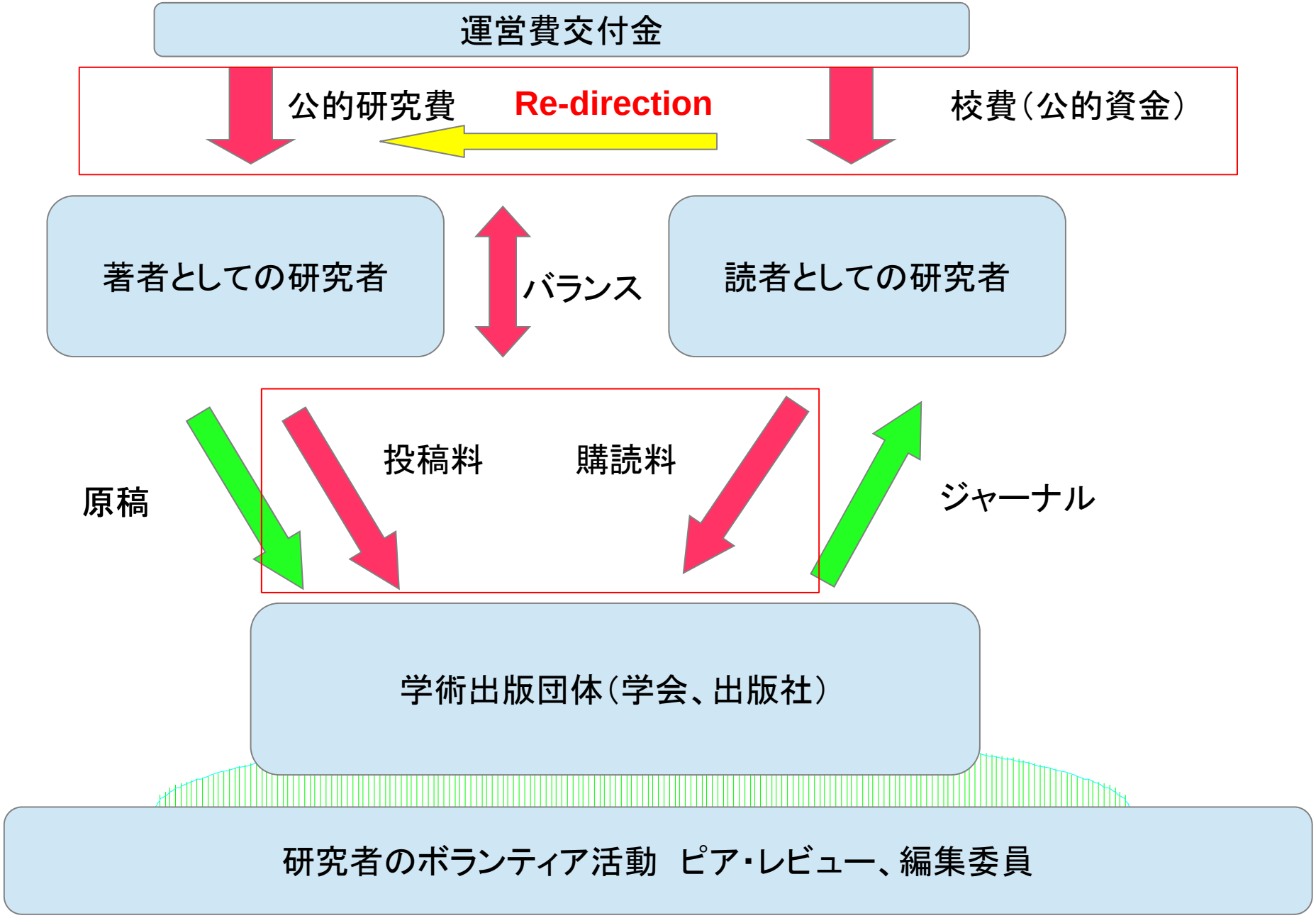
Optics Express

2011

2997 papers

26983 pages

Open Access を議論する場合の超えられない保存則とは？



すばらしい考えが浮かんだとき、物理学者が最初に考えること

運動量保存則、エネルギー保存則に反していないか。

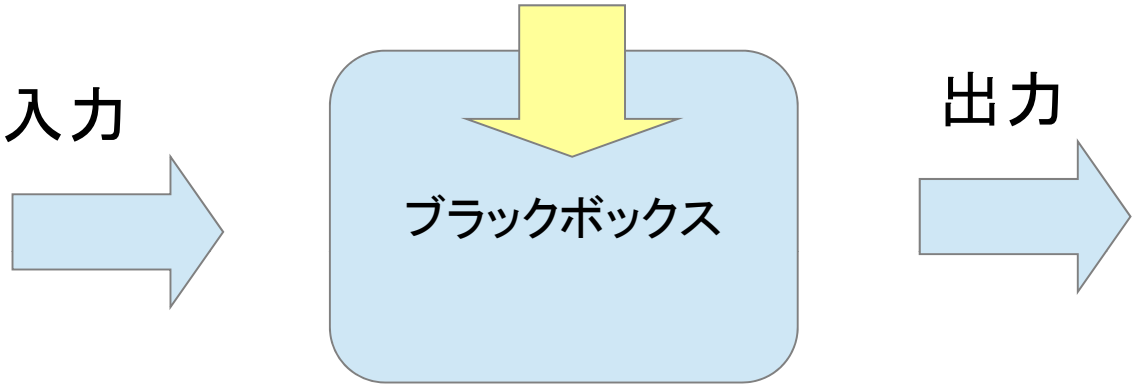
熱力学に反していないか。

永久機関はあり得ない。

すばらしく見える考えは、往々にして、基本法則から逸脱している場合がある。その場合は、いくらすばらしい考えも、実現することはできない。

物理の研究者はいつも痛い目に遭っている。

それに挑戦して跳ね返されているのも、研究者の宿命



入力なしに出力なし

出力が増えたときは、
どこかから入力がある。

学術出版におけるStakeholderとは？

Stakeholderとは、本来、リスクあるものに掛け金を払うものを指し、発言権の裏付けは自分から差し出すものに依存する。他に多くの要求する場合は、それだけの負担をする。

Open Access化を自ら推進しようとするものは、正しい人である。

Open Access化を、他人に強いるのは、必ずしも正しいかどうかわからない。

他人に強いる場合は、Open Access化が持続可能な舞台を作る義務がある。また、自分がどれだけ負担するかを明白にしなければいけない。

Open Access化は、短期間、Mission Orientedなものとしてはあり得る。（基金、強力なボランティアなど）（JHEPの例）

Open Access化を持続可能にするには、それなりの特徴がいる。
（Optics Expressなど）

それはある種の差別化であり、すべてが同等になれば、その利点も消滅する。すなわち、全部がOpen Access化することはできない？（競争力強化としては）

ならば、OA化の後に来るものは何か？

OA化競争が質の向上につながる保証はない。

OA化の後に来るものは何か？

差別化がなくなれば、出版サイドでは　OA化をするメリットがなくなる。

すべてのジャーナルへの投稿料を補助したら、予算助成は巨額となり、維持できない。

投稿料、購読料が反映していた論文の質を反映したバランス機構、質における市場原理は、何に取って代わるべきなのか。（質の保証の平衡メカニズム）

ジャーナル、論文投稿料への支援には、質の評価が必要になる。ジャーナル別か、論文別か。論文別は、新たな論文査読システムが必要になるので、現実的ではない。

結果として、OA化の進展に伴い、ジャーナルの選択、集中が進み、論文数の増加を制御する？　　（SCOAP3はすでにジャーナル選別を行った。）

研究者の立場からすると、

研究成果の自己評価は、競争率という壁を越えて質の論文を出版するか、に反映する。

出版のための障壁は、ジャーナル評価（IFだけではない）、論文出版経費でもある。

OA化の時代にも、高い質で、高い出版経費、購読経費が必要なトップジャーナルは継続するか。

本当に、トップジャーナルさえあればよいのか。裾野ジャーナルも重要では？